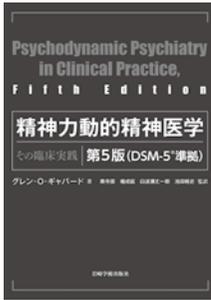


## ■ 書 評



### 精神力動的精神医学 第5版 —その臨床実践—

G. O. ギャバード 著  
奥寺 崇, 権 成鉉,  
白波瀬丈一郎, 池田暁史 監訳  
岩崎学術出版社  
2019年10月 544頁  
本体価格 8,500円+税

本書は米国の精神分析の第一人者であるグレン・O・ギャバード博士による力動的精神医学とその治療アプローチについて詳述したものである。1997～1998年にかけてDSM-IVに対応した第4版の日本語訳が出版されていたが、DSM-5に合わせて今回大幅に改訂された。

冒頭部分には「精神力動的精神医学」について『無意識的葛藤、精神内界の欠損と歪曲、および対象関係を含み、これらの要素を神経科学の現代の知見と融合する』として、力動精神医学を基礎に置きつつ、最新のエビデンスも取り入れた診断と治療の取り組みと述べられている。また、『六分儀を持たない船乗りのように、理論を持たずに無意識という暗い海の航海に出る精神科医は、洋上でたちまち航路を見失うであろう』とあり、六分儀に喩えて「無意識」を扱うためのナビゲーションの必要性を述べている。このような道しるべとしての位置づけに留まらず、『力動的な情報に基づいたdynamically informedアプローチは精神科医の実践を高め、人の精神の不思議を把握する臨床医のセンスを増強する』として、精神科医の臨床力を高めることを主眼としている。

本書における力動精神医学は、①Freudの古典的精神分析理論に由来する自我心理学のみならず、②対象関係論、③Kohutなどの自己心理学、④愛着理論、という主要な4つの理論を包摂している。第1部の力動精神医学の基本原則と治療アプローチは総論にあたり、6章にわたって力動精神医学の基本的な解説と治療設定について記述されている。第2部のDSM-5障害への力動的アプローチは各論にあたり、各精神疾患について精神力動的な理解と治療的考察（アプローチ）が記述されている。

評者にとって印象に残る内容として、転移、逆転移、抵抗、そして治療同盟は力動的な精神療法の基本であるが、これらの要素は精神分析的精神療法に留まらず、通常精神科医が行う一般診療、例えば薬物療法においても当てはまることが解説されていた点がある。『薬物を処方する精神科医は、精神療法家に劣らぬほどの転移の対象となる。患者にとっては、医師の指示に従うかどうか、という決断は両親の期待という無意識的な問題を賦活する』(p.124)とか『力動的な薬物療法における転移の固有の側面は、薬物そのものに対する転移である。薬物への偽薬反応は、しばしば同様の転移の性質を持っている。偽薬による副作用もまた一般的である』(p.125)といった文章は精神科薬物療法の諸課題に精神力動論の観点から光を当てるものである。

その他、本書の実践的な面を示す例として、自己愛性パーソナリティ障害へのアプローチがある。第16章では、このパーソナリティに関する、KernbergとKohutという主要な2つの学説を約15ページにもわたって詳述している。『自己愛の連続体の1つの極として、周囲を気にかけないタイプで、他人の関心と称賛を求め、羨望に満ち、貪欲なタイプの自己愛者(Kernberg)と、もう1つの極として、軽蔑に脆弱で自己断片化しやすい、周囲に過剰に気をかけるタイプの自己愛者(Kohut)がいる。』(p.401)と両者には全く異なる側面があることがわかる。その上で、『どちらかが「正しい」のかに強迫的になるよりも、患者の言葉に注意深く耳を傾け、転移と逆転移の発展を観察し、とりわけ試行的な介入に対する彼らの反応に注目することに専念するほうが治療者には有益だろう。』(p.414)とあり、患者さんの言葉に耳を傾けるという基本の大切さがよくわかるものであった。

日本精神神経学会に関して、専門医制度の確立とともに精神療法についての研修を行う役割を本学会が継続的に担う立場である。特定の流派にとらわれない、患者-治療者関係を精緻に確立しつつ、人と疾患の両方を手当てするような精神療法の技法を習得することが個々の精神科医に求められる。そのためにも具体的かつ実用的な指図書として本書の意義が感じられた。

(谷井久志)